地方の活力を生かして

西川一誠・福井県知事
ふるさとを語る

聞き手　有村かおり氏

にしかわ・いっせい　1968年京都大学法学部卒、自治省入省。自治省企画課長、国土庁長官官房審議官を経て、95年福井県副知事。2003年より現職（現在２期目）。福井県出身。

ありむら・かおり　東京大学文学部卒、ニュージーランド・ヴィクトリア大学国際関係学修士号取得。東京放送キャスターを経てフリーに。現在、キャスター・小説家として活躍する。

地方と都市の格差が叫ばれて久しいが、強力な市場経済主義によって、その格差は広がるばかりだ。西川一誠・福井県知事は、『ふるさと』をキーワードに、失われつつある「人と人、人と地域のつながり」を取り戻すことで、地方そして日本を立て直そうとしている。豊かな自然とその恵みでもある食材、そして世界に冠たるオンリーワン技術を数多く擁する福井県。自らの『ふるさと』でもある福井を元気づけようと、こうした資源を生かした活動を展開する西川知事の理念や実践内容を、フリーキャスターの有村かおり氏に聞いてもらった。

越前がには新鮮さが売り

有村　実は私、南青山に住んでいるのですが、４年前から福井県のアンテナショップ「ふくい南青山２９１」の会員です。インターネットで情報をもらっていますが、福井県は素晴らしい産物にあふれていますよね。

西川　ちょうど今はカニの時期ですが、福井は名産地なんですよ。日本海には松葉がになどいろいろありますが、福井の「越前がに」が一番おいしい。というのも、他の産地は漁のために沖合まで出ますが、福井の海はすぐ深くなるので漁場が近く、新鮮なんです。

有村　越前がにも素晴らしいですけど、陶器や漆器をはじめ、福井にはいろいろありますね。

西川　まず古いのが越前市の越前和紙、それから鯖江市の漆器です。継体大王の時代ですから１５００年以上前になります。越前町には日本六古窯の一つ、越前焼もありますし、越前市には打刃物もあります。

「自然と歴史が育んだ名産品。知名度を高め、真のブランドへ」

それから、オバマ大統領で名をはせた小浜市には、若狭塗箸もあります。

有村　貝殻や卵殻を色とりどりの色漆で塗り重ねたお箸ですよね。とてもきれいなものですよね。

「おばま」つながりを使っての売り込み方は、地方からの発信という意味では有効な手段の一つでしたね。

西川　外との新しいつながりを作って、地域の活力を生み出すよい見本だと思いますね。

きっかけは、２年前の朝のテレビ小説です。小浜を舞台に「ふるさと」をテーマとしたドラマでしたが、多くの観光客が訪れました。それで、自分たちも頑張ればアピールできると考え、行動しました。現在は、かつて朝廷に食べ物を献上していた「御食国（みけつくに）」として売り出そうと、サバ寿司や焼きサバ、伝統食でもあるサバのぬか漬け「へしこ」、さらには最近では若狭ふぐなどを積極的にＰＲしています。

有村　２００８年から東京の神楽坂で福井を知ってもらうためのイベントを開かれているそうですが、狙いはどういうところにあるのですか。

西川　福井は関西に近いため、関西圏では知られていますが、東京ではどうしても知名度が低い。極端な言い方をすれば、東京の方は福井に行くには新潟を通ってその先にあるとかね。一極集中がいいか悪いかは別として、やはり東京に売り込む必要があります。「ふくい南青山２９１」はアンテナシ

東京での情報発信拠点「ふくい南青山291」

ョップというだけではなく、福井のブランドを売り込むところで、神楽坂でのイベントもそのひとつです。

神楽坂と福井は縁があるところで、徳川三代将軍家光の重鎮として名をはせた小浜藩主・酒井忠勝公の下屋敷があったところなんです。

有村　291の会員である私からすると、ふくいブランドって結構価値の高い、付加価値のあるブランドというイメージがありますが。

「実は福井」を数多く保有

西川　実力はあるんですよ。コシヒカリは新潟ではなく、実は福井で開発された品種なんです。

昨年、東京・神楽坂で行われたイベント

有村　私も今回、資料を見ていてびっくりしました。

西川　そういうものなんですね。メガネフレームも実は鯖江で日本のほとんどを生産していて、この「実は」とつける必要のあるものが多い。実力はあるのですが、ブランド力が伴っていないのが欠点なんです。

有村　私の出身地の鹿児島でつくられている幻の焼酎とも言われる「森伊蔵」のこうじ米にも、福井のお米が使われているそうですね。

西川　そう、福井のコシヒカリです。ただ、福井産を使っているってあまり知られることはない、素材ですからね。

有村　こんなにいいものがいっぱいあるのに発信力が足りないのかもしれませんね。

西川　主な原因は立地上の問題かなと思います。大阪、名古屋、東京いずれからも「時間的に」遠い場所にある。もう一つは、県が小さいこと。PRをはじめさまざまなことをするにしても、大きなものの中に埋没してしまう。

有村　でも、今は一生懸命ふくいブランドを確立しようと努力なさっています。

西川　昨年4月に県庁に「観光営業部」という部署を作りました。役所で「営業」という言葉を使っているのは、他にはないと思います。

狙いは、県の職員自らがふくいブランドを積極的に売り込もうということです。公務員が何か売り込もうとすると、これは公務員だからしちゃいけないとか、ここまでだ、と言い訳するでしょう。これをまず言わせない。もう一つは、周囲に対するアピール。公務員が変わったことをしていても、営業だからしかたない、といったふうにね。

「一極集中が地域間格差に。都市は地方が支えている」

有村　地方のガバメントと産業とのマッチングですね。知事は昨年出版した著書のなかで、東京への一極集中により、都市と地方の格差が広がっていると問題提起していらっしゃいますが、どういう状況なのでしょう。

西川　一つはインフラです。これまで大都市に投資を集中し、地方への投資は後回しにしてきたから、高速交通網があと一息のところで止まってしまっていることが格差の原因の一つだと思います。

もう一点は、三位一体改革。地方の自主財源を増やすため、地方税を増やして国庫補助金を減らすという考えは良かったのですが、地方の共通財源である地方交付税を国庫補助金と同様な扱いにして何兆円も減らしたことで、財政的に疲弊してしまったことです。

さらには、経済至上主義も大きな問題です。巨大なショッピングセンターが進出して、地元の商店街が疲弊してしまう例もよく聞きます。

有村　つまり、投資の仕方に問題があったということですね。日本が成長している時代に都市や太平洋ベルト地帯にたくさんの投資をし、地方に投資するべき時期が来たときには、すでに投資する余力がなくなってしまったということですね。

実際、民間企業と協力して旅行会社などに売り込んでいますし、企業に出向いての展示商談会なども行っています。

西川　なくなりましたね。経済状況も変わり思想も変わってきて、投資自体が無駄だという感じが出てきましたね。新政権では、地方をないがしろにすれば、日本全体が悪くなるということを理解してもらわないと困ります。

有村　知事は地方が都市を支えているという強い信念を持っていらっしゃいますね。

西川　互いに支え合っているんですが、片方は無視されているから、地方のことを強調しないといけないという思いがあります。

地方が支えているものでは、例えば電力。関西地域の電力の約5割は福井県にある原子力発電所から送られています。東京も同様で、福島県や新潟県から大量に送られています。

人材もそうです。福井県は毎年3千人の高校卒業生が東京や大阪に出て、数年後に戻ってくるのは千人です。0歳から18歳まで育てるにはおよそ1800万円かかりますが、それだけかけて育てた人材が、東京や大阪で働き、そこに税金を納めているのが実態です。

有村　そこで提唱したのが「ふるさと納税」という方法ですね。

ふるさとを思う心で

西川　都会に暮らしていてもふるさとを思い、ふるさとを応援したいと考えている人に、ささやかでも協力をしてもらおうと考えたわけです。ただ、現状はお金の話であり、もっと中味を充実しなければならないでしょうし、さらには都会と地方を行き来しあえるようなシステムができないものかと思っています。国土計画がいると思います。

有村　全体的なプロセスといったものがないと、地方はますます不安になってしまいますよね。

西川　地方で頑張る者を国が応援するシステムが必要だと思います。どうも政治家は東京バイアスでみているようで、今言われている道州制とか地方交付税の削減などは中央集権的な発想ではないでしょうか。

有村　東京バイアスの視点ってすごく強くはびこっていて、なかなか変えられないのじゃないですか。

西川　やはり東京に対抗できる大都市が必要です。そういう意味

では大阪にこそ頑張ってもらわなきゃいけない。そのためには、地方の代表というような発想ではなく、東京と対等なんだという気構えで立ち向かってほしい。そうでないと地方はますます地盤沈下してしまいます。

有村　福井県は生活のしやすさや子どもたちの学力、体力など日本トップクラスを誇るものが多いですよね。働く女性として言わせてもらえれば待機児童ゼロというのもすごい。

西川　学力体力が日本トップクラスというのも、学校だけでなく、家庭や地域における子育て・教育環境があるからだと思います。福井は三世代同居率が全国第2位の高さであり、共働き世帯では、おじいちゃん、おばあちゃんが孫の面倒を見るなど家族みんなで支え合う子育て環境があります。また、県民の暮らしの満足度は高く、昨年8月から9月にかけて実施した県民アンケートの結果によりますと、本県に住むことに満足しているという回答は83%でした。

有村　知事の持っている「新しいふるさと観」というのはどういうものですか。

「つながり」を立て直す

西川　一言で言えば、希薄化した人と人、人と地域との「つながり」を取り戻すということです。といっても、過去からの「ふるさと」という歴史の積み重ねに加え、それぞれが自由な意思に基づいて新しいつながりを作り上げるという要素が加わります。このためには、その地域に暮らす人々の一体感を強める活動と、他の地域に住む人々とのつながりや連携を生み出す活動が必要です。

有村　知事がご本の中でおっしゃられている内とのつながりと外とのつながりのことですか？もう少し具体的にお聞かせください。

西川　地域が育んできた良いところとは、案外見落とされがちで、外の目で発見されることが多く、まちづくりには地域外の人たちの力やエネルギーを取り込んでこそ、より豊かになることができます。自由と共同性は、相対するものととらえられがちですが、共同体のなかでは相手を思いやる心があってこそ自由が守られるわけで、好意や親切をやりとりする社会、素直に助言できる社会が醸成されなければ、幸福や希望を持つことはできないと思うのです。

希望を持ち、地域への誇りや自信を抱く人間像を教育や自治の場で実現する方向性、それが「ふるさと」の発想です。

「交通網整理と一次産業の再生。原子力産業育成で活性化」

異業種連携進めて復活

有村　福井県がふるさととして元気になるためにいま進めていることをちょっと教えてください。

西川　まずは交通インフラですね。北陸新幹線は金沢止まりになる恐れがあり、何とかして福井まで延線を実現しなければなりません。

農林水産業の再生も重要です。これは食や健康など福井の豊かさを支えるものですが、危機的な状況にあります。商業や工業など他の産業との連携などを進めて、何とか復活させたいと思います。

もう一つは、原子力関連産業の育成などによる地域振興です。福井県は日本有数の原子力推進県ですが、地場産業で原子力関連にかかわる企業は育っておらず、メーカーなどとのつながりを強める必要があります。

有村　温暖化問題から原子力は世界規模で見直されていますね。

原子力技術を福井から世界へ

西川　そうです。中国はもとよりアジアを中心に原子力産業が進んでいくことになるでしょうが、そうすると技術者、研究者が必要になります。そこで福井県では、「エネルギー研究開発拠点化計画」を策定し、原子力の安全はもちろん、技術者や研究者の育成拠点となるべく、大学や企業、研究機関との連携を推進しています。

ヒートポンプを利用したトマト栽培ハウス

有村　原子力誘致に当たっては、反対の声もあったと思うのですが、どのようにして乗り越えられたのでしょう。

西川　誘致に当たっては「安全・安心」「地元の合意」「地域振興」の3原則があります。拠点化計画は安全・安心、地域振興に深くかかわっています。それとこれは特に大事なことですが、立地地域の人々は勉強もしていますが、都会の方々は恩恵を受けているにもかかわらず、原子力や立地地域に対する理解が足りません。消費地と生産地は互いに助けあうという気持ちを持ってほしい。そのためにも、一度は発電所を見学してもらいたい。

有村　都会の人は、電気が使えるのは当たり前だと思っていますよね。どこでどうやってつくられているかを考えないまま恩恵を受けています。主人が赴任した外国のなかには、日中何時間も停電するのが当たり前みたいな国もあります。日本はなんて幸せなんだって思いました。

西川　日本の電気事業者は、一瞬たりとも供給を止めちゃいけないという使命を持って取り組んでいます。そしてその崇高な使命を果たすために、われわれ立地地域も協力しているのです。そういったことを電力消費地の皆さんには分かってもらいたい。

有村　日本の原子力技術は世界に誇れると思いますし、日本人の緻密（ちみつ）な性格は、原子力を扱う上で向いているとも思います。技術だけでなく、いろんなものを世界に発信できるのではないでしょうか。

西川　そう思いますね。いろんな意味で福井や日本が先導的な役割をしないといけない。そのために、福井県では福井大学や福井工業大学で技術者、研究者の育成に力を入れており、数年後には研修施設もできます。その際には海外からの研修生も受け入れる計画です。

有村　何か福井がとても身近になりました。本日はありがとうございました。